

はたちを

日ざしたい大養はう経営

養はう(蜂)
花のジブシ

一と、良く

かし、現在で

は、みつ(蜜)

源の植栽に

よる定飼養蜂

が盛んになり

かなりの成果

を上げている

が半径二キロメ

トトル一千五

百ヘクタール

の土地が行動範囲である。私

が調べたところ、甘樂には、

良いみつ源がある。ひとつは

雄川、錦川沿岸のアカシヤ、

もうひとつは、山のくりであ

る。

前者は、開花期が七~十日

と短かいが、良いみつである。

は、幅広い農学にも精通して

いなければならない。日本は

いなければならぬ。

日本は、

養はう(蜂)行政をはじめ大学

の諸研究機関など、米国、ソ連

欧州諸国より、格段の遅れを

とっている。砂糖の輸入国で

あり、はちみつの入超になっ

てしまった日本は、糖類確保

の面から見ても、養はう(蜂)

思っている。いつギヤーがバ

ックにはいり、後退してしま

うかも知れないが、とにかく

「やれるか」でなく「やって

みる」である。脱輪もあるう

ないだろう。幸い父も理解が

あり、好きな車を自由にさせ

てくれるのであらせである。

イスをしてくれるので、今

ところ正常な軌道を走ってい

る。つばは広義の畜産の中

にはいる。だが、経営上、一

番大きな相違点は、飼料を必

要としない点であろう。牛や

豚は、飼料を摂取した上で乳

や肉を作るが、はち花から

みつをとり、貯えて群を増や

るかと言えば、そうではない

恐ろしい病気もあるし、書敵

春、青い空といきいきとし

た土。そして、澄みきって星

のさわやかな秋。カラカラと

風の渡る冬も、いつも私たち

にあたたかい、ふるさと。こ

とに生れ、生きる私たちを豊

かに抱擁するやさしい甘樂野

の時代を迎えようとしている。

すべての事象に対する新鮮

な驚きに、日にちをいろどら

れていた幼時、そして疾風怒

涛の青年前期における強烈

な悩みや喜び、これらの成長

成人という言葉は、かつて

ない重々しさをもって、私に

てしまうこと。つまり忙し過

ぎると言ふことかも知れませ

ん。しかし私は、女性である

前にます人間であることを忘

れています。幼少期の歴史が、

私の意識の中で鮮明に展開している。

成年として正しい政治家を

選ぶ義務があり、またそれ

を怠らなければなりません。

しかし私は、女性である

からこそ、おとなの社会で

あることは、取扱いが

あります。これが、もつと独創的

な人生を送るために、

力を使わなければなりません。

しかし私は、女性である

からこそ、おとなの社会で</p